



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

# 滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

## 自然は人間の苗床

藤沢周平（一九九五）「聖なる部分」、  
「ふるさとへ廻る六部は」  
新潮文庫、所収（一部抜粋）

そついう子供だったから、学校から帰ると鞆を放り出してすぐに遊びに行くのが日課だった。そして、いったん外に遊びの種があったら、草笛を鳴らし、笛舟をつくり、スカンボや野いちごを喰べ、木のぼつてスモモを喰い、ヨシキリの巣をさがし、ムクドリやジョウビロウをさらい、メダカやドジョウをとつた。夏は朝から日暮れまで泳ぎ、冬は雪道をつくつたり、スキーで滑つたり、カマ（カマクラ）をつくつたりした。中でも私は、若干の悪意とユーモアのこもる仕掛け、雪の落とし穴づくりなどに、自然相手した遊びのほかに、外からそのときどきの流行の遊びが加わることがあった。メンコとか日光写真とかである。これだけおもしろいものがまわりにあつては、なかなか学校の勉強まで手が回らないわけである。私は朝から晩まで、といつても昼は学校に行き、又時には庭を掃いたり家業の農業を手伝つたりするわけだが、そうしたことをのぞいた残りの時間を、ただただ遊び呆けて過ごしていたように思う。親は比較的寛大に遊ばせてくれた。そのことを私は親にだけ感謝しているか知れない。子供のころに、自然の感触がなつてたしかめるような時期があったところ、一行だつてまともな自然描写など出来るはずがないと思うからである。

4月16日（水）の朝、つきのわ駅方面に登校指導に出向くと、月の輪小学校の1年生児童が、植物の鞆を手にしていました。「それは何ですか？」と尋ねると、「カラスノエンドウです」と明瞭に答えてくれました。続く会話の中で、カラスノエンドウは天ぷらなどにして食べることができること、しかし、野に自生しているものなのでむやみに口にしない方がよいこと、食糧危機などの際に食べた方がよいこと等を次々に教えてくれました。「どうして植物が好きになったの？」と尋ねると、お父さんがキノコが好きだったので自分もキノコが好きになったこと、するとお父さんがキノコの図鑑を買い与えてくれたこと、キノコから植物に興味の対象が広がったこと、今では植物図鑑を7冊持っていること等を教えてくれました。児童の受け答えはハキハキしており、とても説明が上手でした。児童との会話を通して「子育てと自然」というテーマが頭に浮かんできました。

この季節になると、巣を出入りするアリを見かけることが多いと思います。思わずその動きに気を取られて、つい見入ってしまった覚えがたいのいの人にあるのではないのでしょうか。特に子どもの頃には、巣を出入りするアリに魅せられて長い時間をつぶした経験があるに違いないと思います。子どもは、いつでも虫や自然が好きなのです。「自然は人間の苗床」という言葉があります。幼い頃からの自然とのふれあいによって子どものみずみずしい感受性や五官を刺激することができます。「沈黙の春」で有名なレイチェル・カーソンは、「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）」の重要性を指摘し、「子どもたちが出会う事実ひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです」と述べています。また、「この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤となるのです」とも述べています。各種調査結果（「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」等）は、自然体験が人間の成長や精神的な発達に大きな影響を与えることを示し、カーソンの主張を支持しています。

また、豊かな自然体験はことばを豊かにし、想像力を高めていきます。「蝉しぐれ」「たそがれ清兵衛」などで知られる藤沢周平（1927-1997）の作品の魅力の一つに、単なる風景描写にとどまらない、登場人物の感情や心情と深く結びついた自然描写があります。冒頭に紹介した文章から藤沢の卓越した自然描写力は、幼い頃の自然体験に裏打ちされたものであることが分かります。都市化が進んだ現代においては、藤沢のような豊かな自然体験は難しいかも知れませんが、身近な道端や公園でもちょっと注目して探してみると草木や昆虫などいろいろな生き物がいることが分かります。「ちょっとした工夫で自然体験はできる」・・・紹介した児童は、そのよいモデルなのではないでしょうか。

## 定例生き物・水質調査実施中！

滑川町では令和3年度より、町内の特色でもある里山の自然環境を、地域連携して保全・再生することを目的とした「地域の自然環境保全 滑川町里山プロジェクト」という事業を展開しています。

この事業の一環として、令和4年度から森林公園内の沼にて、毎月1回、福田小学校児童ボランティアとの生き物水質調査が始まりました。現在では滑川中学校・滑川総合高等学校の生徒も交えて活動をしています。調査では沼内に5ヶ所の調査ポイントを設定し、水の中性度を示すpH、水に含まれている有機物から水の汚れ具合を示すCODや透視度を測定したり、網キラを仕掛け、在来種・外来種がどれほど生息しているか等を調べたりしています。

この森林公園内に広がる豊かな自然環境での活動によって、町への誇りや愛着心を育み、暮らしを長く支えた里山や沼を町にとってなくてはならないものであると再確認するとともに、更なる人づくり、地域づくりに繋がり、滑川町の伝統的な里山の環境と文化を継承していく一助となれば幸いです。

このボランティア活動にご興味のある方は是非エコミュージアムセンターまで御一報ください。



沼水採取と網キラ設置の様子



透視度計で透明度を計測する様子



捕れた生き物を確認している様子

新シリーズ  
第4回

## 「滑川町の歴史」 part 4



### 縄文時代の滑川町 ～竪穴住居での暮らし・最初の滑川定住者!?

縄文時代になると、旧石器時代までの狩猟対象である動物を追いながらテントのような簡単な住居での短い滞在期間で移動していくキャンプ生活から、主に竪穴式住居と呼ばれる地面に穴を掘りくぼめ、木の柱で屋根を支える住居での定住生活に変わっていきます。竪穴式住居は、一般の人々が生活する伝統的な家として縄文時代以降、平安時代頃まで作られ続けます。

竪穴式住居は、数十cm地面を掘った後に柱を建てるための穴が掘られ、その後柱穴に柱が立てられます。その柱を軸に木を組み、植物のツルなどで固定され、木の樹皮や草などで覆い、掘った際に出た土を被せるなどして屋根が作られます。縄文時代には、住居中央に調理や暖をとるための炉が設置されることが多くあります。

滑川町では、羽尾にある打越遺跡で長径3.7m、短径2.7mで不整楕円形の皿状にくぼんだ縄文時代草創期の比企郡でも最古級の住居跡が確認されています。滑川町には、縄文時代の幕開けとともに竪穴式住居での暮らしを始めた人々がいたようです。



竪穴式住居での暮らし(イメージ)



縄文時代草創期の竪穴式住居跡  
(羽尾打越遺跡)